

## 和文露訳の問題点(2)

### ——連体修飾表現の翻訳法についての試論（その1）——\*

高橋 健一郎

#### はじめに

ロシア語の初学者にとって困難な点の一つに日本語の連体修飾表現の露訳がある。それは日本語の連体修飾表現では「主名詞とそれに先行する修飾節のあいだの多様な関係的な意味が形のうえで明示されない」（益岡 2009: 19）のに対し、ロシア語ではつねにその関係を形態論的、統語論的レベルで明示しなければならないからである。

例えば

- (1) 「本を買った学生」（以下、日本語の例文は連体修飾節を下線、被修飾名詞（主名詞）を二重下線で表す）

という日本語は少なくとも4通りの解釈が可能であり、それをロシア語で表すと次のようになる<sup>1</sup>。

- (2) студент, **который** купил книгу  
(3) студент, **которому** X купил книгу  
(4) студент, **у которого** X купил книгу  
(5) студент, **с которым** X купил книгу

\* 本研究は平成20年度札幌大学研究助成制度による研究成果の一部である。

<sup>1</sup> 日本語では「本を買った」主体が示されていないため、(3)～(5)のロシア語訳では主体をXで示している。

特定の文脈がなければ、このうち(2)が最も普通の解釈となろうが、(3)はある人が学生たちにいろいろなプレゼントを買っている状況では自然であり、「本を買った学生からパソコンも買った」という文においては(4)も十分普通である。(5)も特に「いっしょに」などの言葉を加えて「昨日私がいっしょに本を買った学生」という文脈では十分可能な解釈だろう<sup>2</sup>。

つまり、日本語では「本を買った」という修飾節（以後「連体節」と呼ぶ）と「学生」という被修飾名詞（以後「主名詞」と呼ぶ）がただ並置されるだけであり、その両者の間の関係性が形式上明示されないのに対し、ロシア語では関係代名詞によって「学生」と「本を買った」の間の関係が統語論的に決定されるのである。日本語話者のロシア語学習者が連体修飾表現の露訳に困難を感じ、誤りを犯すことが多いのもここに理由がある。連体節と主名詞の間に格関係が想定される場合であってもそれを明示せず、したがって意識する必要もない表現に慣れている日本語話者にとって、ほとんどすべての場合に格関係を明示しなければならぬロシア語への翻訳に際しては、意識的に格関係を考えることが必要で、学習者は大きな意識の転換を求められるのである。

しかし問題はそれだけではない。上記の名詞句の例は格関係を想定することが可能であり、それを意識しさえすればロシア語に訳すことはそれほど困難ではないが、日本語の連体修飾表現には、連体節と主名詞との間に格関係が成立するとみなしにくいものも多いのである。例えば次のような例を見てみよう。

- (6) 私たちが勉強している上で誰かが柔道の練習をしていた  
 (7) たばこを買ったおつり

これらの名詞句はどれも修飾節と非修飾語の間に（少なくとも日本語では）直

<sup>2</sup> これは松本善子が日本語と英語の関係節を比べながら挙げている例である（松本 1993 : 103）。ただし松本はこの日本語の名詞句は「3通り」の解釈が可能であるとし、(2) (3) (4)のみを扱っている（ただし英語）。しかし別の項では[[由美がいっしょに食べた]人]という例を挙げ、随格の「と」をとる名詞もまた関係節構文をとり得ることを示しており、この「本を買った学生」という名詞句もまた(5)のような解釈は十分可能である。

接的な格関係は認めがたく、露訳に際してはさまざまな言葉を補う工夫が必要になってくる。

また、

(8) 祖母が死んだ(という)事実

のように、連体節と主名詞の間に基本的に「～という」という言葉が用いられ得る表現も露訳に際して問題になることがある。ロシア語では、что 節を名詞に直接つけることが可能な場合もあり、(8)に関しては факт, что... で露訳が可能だが、例えば

(9) 祖母が死んだという電話

のように、日本語では「という」の接続形式が可能であっても、ロシア語では直接 что をつなげられない場合も多くあり、日本語の「～という」よりも、ロシア語の что 節の可能な範囲は狭いようである。このように連体修飾表現に関しては露訳に際してさまざまな困難な点があり、本稿ではその問題点を整理することを目的とする。その出発点として、まず従来の日本語学の分野での連体修飾表現研究を概観しておこう。

## 1. 日本語の連体修飾節：研究小史

上で述べたように、日本語の連体修飾表現は主名詞とそれに先行する連体節の間の多様な関係的な意味が形のうえで明示されないという特徴をもつが、その多様な関係性をいかに分類するかについて 1970 年代ごろから主に寺村秀夫の記述文法を出発点とした研究が蓄積されてきた。寺村の研究(寺村 1975-78)によれば、連体節と主名詞とが格関係で結ばれるものが「内の関係」、結ばれないものが「外の関係」と分類され、後者はさらに、「ふつうの内容補充」と「相対的補

充」に分けられる。この分類がその後の連体修飾研究を規定してきた。

同時期の研究として、奥津敬一郎や井上和子らの生成文法の立場からの研究もあるが<sup>3</sup>、これらも大雑把なレベルでは、寺村の「内の関係」と「外の関係」の分類に近い。

しかし、その後 1980 年代後半、特に 1990 年代以降には、認知言語学や語用論の立場から新たな志向をもった研究が現れるようになる。「従来の研究では、限定の仕方の多様性に注意を払うあまり、その多様性にもかかわらず限定の表現として同一の接続形式が与えられるという面が軽視されてきたように思われる」（益岡 1997 : 32）という言葉に代表されるように、日本語で明示されない格関係を復元して細かく分類したり、複雑な変形規則を立てたりという方向性から、なぜ日本語話者がこの多様な修飾関係を未分化なまま形の上で区別しないで表現し、それを理解できるのかということについて意味論的、語用論的な観点から説明を与えようとする方向性へと研究の重点がシフトしてきているようである。

例えば、松本善子の挙げる例を見てみよう（松本 1993 : 105）。

(10) 智ちゃんが買った店はどこ。

(11) 千さんが買った店はどこ。

この両者の文の解釈は、主語である「智ちゃん」と「千さん」がどういう人物であるかという知識によって大きく変わる。「智ちゃん」が子供であり、「千さん」が大金持ちでビルや店などを次々と買っているような人物という知識があれば、(10)の「店」は「智ちゃんが買い物をしたところ」であり、(11)の「店」は「千さんが購入した対象」という解釈が最も自然であろう。このように、「日本語では、構造的に主要名詞と修飾節内述語の文法関係を規定するものが顕在せず、統語的な限定が不足しているとも言え、聞き手（読み手）は意図された解釈を得るために言語・言語外的なコンテクストに与えられた手がかりや常識を積極

<sup>3</sup> 奥津（1974）や井上（1976）を参照。

的に駆使せざるを得ない」(益岡 1997 : 32) のであり、「純粹に統語論的、構造的に分析するものだとされてきた関係節や「内の関係」のような構造も、実はもっと意味的、語用論的な性格を持っており、構文要素の意味が重要な役割を果たすのはいわゆる同格節や「外の関係」の構文だけではなく、連体修飾構文すべてに言える」(松本 1994 : 127) のである。したがって、日本語の連体修飾の研究が統語論的なものから語用論的なものへとシフトしていくのも当然であろう<sup>4</sup>。これは例えば、「私が長年不思議に思っていることの一つだが、日本語の文法研究者の中に、英語に翻訳しつつ日本語を考察していると思えないタイプの人たちがいる」(金谷 2002 : 168) という、外国語(たいていは英語)との比較によってばかり日本語文法が考えられてきたことへの金谷の苛立ちとも共通するものであろう。

しかし「和文露訳」という問題設定の中に限って言えば、語用論的な説明の仕方は必ずしも有効とは限らない。例えば、語用論的な研究の嚆矢となった白川(1986)は、連体修飾表現の「聞き手の意味解釈のメカニズム」を次のように説明する：

- ① 修飾節は何らかのコトXを表わし、底<sup>5</sup>は何らかのものごとYを表わしている。
- ② XとYとの間には、何らかの意味関係があることが分かっている。
- ③ 聞き手は、その意味関係がどのようなものであるかを考える。
- ④ Xからは、さらに、何らかの状況Zが、語用論的に推論できる。
- ⑤ 聞き手は、底の表すものごとYを、状況Zの中に同定する。

(白川 1986 : 6)

これは日本語話者の意味解釈のメカニズムとしては、おそらく妥当なものであ

<sup>4</sup> 語用論的な研究として上記の松本の研究のほか、白川(1986)、加藤(2003)、認知言語学の立場の研究としては森山(2007)などがある。

<sup>5</sup> 白川(1986)における「底」とは本稿の「主名詞」にあたる。

ろう。本稿でも見るように、日本語は格関係が必ずしも形態論的につねに明示されるとは限らない言語であり、連体修飾表現を叙述文に開くことができない場合があったり、格関係が明確になりづらい場合も多いため、日本語学の研究においては「格関係」という概念をむしろ捨て去って、語用論的な方向性の方が有効とも言えるだろう。しかし、ロシア語はつねに格関係を明示しなければいけない言語であるために、こと「和文露訳」という問題設定においては、白川の語用論的説明は意味をなさず、どうしても格関係があるのかないのかを見極め、適切にロシア語訳を考えなければならない。つまり、寺村流に（あるいはむしろそれをさらに突き詰めて）日本語の多様な修飾関係の格関係をきちんと捉え、あるいは格関係のないものについては、それをロシア語でも表現できるように文法関係、論理関係を考えるという方向性こそが必要なのである。したがって本稿では、日本語学の研究の近年の流れに逆行する形ではあるが、「格関係」という考え方を捨て去ってしまわずに、「内の関係」「外の関係」を地道に考え直しておきたい。

## 2. 日本語連体修飾節の分類

寺村（1975-78）に修正を加えつつ現在まで進められてきている種々の先行研究を参照しながら、日本語の連体修飾表現を整理しておこう<sup>6</sup>。

まず、連体節と主名詞の接続形式を基準にした分類を考えよう。

### (12) 昨日私が食べた食事

のように、「昨日私が食べた」という連体節と「食事」という主名詞が直接接続される形式を「**基本型修飾表現**」と呼ぶ。

二つ目の接続形式は、

<sup>6</sup> ここで参考にしている文献は寺村（1975-1978）のほか、主として日本語記述文法研究会編（2008）と益岡（2002）である。

(13) 彼が死んだという噂

のように、連体節と主名詞を「トイウ」で結ぶものであり、この形式による連体修飾表現を「**トイウ修飾表現**」と呼ぶ。

三つ目の接続形式は、

(14) 彼が死んだとの噂

のように、連体節と主名詞を「トノ」で結ぶものであり、この形式による連体修飾表現を「**トノ修飾表現**」と呼ぶ。

四つ目の接続形式は、

(15) 私が望んでいるような人

のように、連体節と主名詞を「ヨウナ」で結ぶものであり、この形式による連体修飾表現を「**ヨウナ修飾表現**」と呼ぶ。

本稿ではまず基本型修飾表現を中心に扱い、その考察を経たのち、次稿において他の形式について触れることにする。以下、まず基本型について連体節と主名詞の間の関係を整理しよう。

上でも触れたとおり、寺村秀夫は連体修飾表現を大きく「内の関係」と「外の関係」に分ける。「内の関係」とは、端的に言えば、連体節の述語と主名詞との間に特定の格関係が成り立つものであり、「外の関係」は格関係が成り立たないものである。そしてこの「外の関係」はさらに「ふつうの内容補充」と「相対的補充」の修飾表現に分けられる。内容補充とは⑩や⑪のように、主名詞の内容を説明し、基本的に「トイウ」あるいは「トノ」の接続形式で表現可能なものを指す。

(16) 女房の幽霊が三年目にあらわれる(という)話

(17) 清少納言と紫式部が会った（という）事実

それに対し「相対的補充」は、(18)のように連体節が主名詞と相対的な関係にある概念（この例では「当日」）の内容を表すという性格のものである<sup>7</sup>。

(18) 深酒をした翌日

本稿では「内の関係」に絞って、和文露訳の観点から日本語とロシア語の対応を考え、その考察を通して従来の日本語の連体修飾表現研究の問題点も探ってみたい。「外の関係」については次稿で扱う。

### 3. 「内の関係」の連体修飾表現の露訳

上で簡単に触れたように、「内の関係」とは連体節の述語が主名詞との間に「格関係」をもつというものである。では、連体修飾表現の研究においてこの「格関係」はどのように捉えられてきたのだろうか。

「格」とは「名詞類が文の中で他の単語に対してとる関係のあり方をあらわす文法カテゴリ」（村木 2000：49）であり、「日本語の格は、格助詞によって表わされる」（小泉 2007：69）とするのが一般的である。格助詞の数については研究者によって見解が違うが、一般的には「ガ」「ヲ」「ニ」「ヘ」「ト」「デ」「カラ」「ヨリ」「マデ」「ノ」の10個<sup>8</sup>とされる。格関係をこのように「格助詞」の問題

<sup>7</sup> 寺村が「相対的補充」として分類したものについては、「相対的」という名称が不適切な例が多いことから、のちに「縮約的修飾表現」と名付けられたり（益岡）、「相対名詞修飾」と「付随名詞修飾」の二つに分けられたりなど、他の研究者によって修正が施されている。これについても次稿で扱いたい。

<sup>8</sup> 例えば小泉（2007：72）を参照。「ハ」を格助詞に含めるか否かについてはさまざまな議論があるが、本稿では「ハ」は格助詞に含めない。また「ノ」を格助詞に含めない立場もあるが、連体修飾表現において「ノ」を伴う名詞が主名詞になるとみなせる例もあることから、本稿では「ノ」も含める。



に限定するには実は大きな問題があるのだが<sup>9</sup>、これらが日本語の格関係の基本にあることは間違いなく、従来の多くの連体修飾表現研究でもほぼ踏襲されてきた考え方なので、本稿ではまずはこれにのっかって論を進めていく。日本語の格を格助詞のみによって考察する問題点については次節で扱う。

一方、ロシア語では格は基本的に名詞類の格語尾と前置詞によって示される。すでに触れたとおり、連体修飾表現における連体節の述語と主名詞の間に格関係がある場合、その関係はロシア語では基本的に関係代名詞の格語尾や関係代名詞とともに用いられる前置詞によってほぼつねに明示されるのに対し、日本語ではそれが形態論的に示されないために、和文露訳に際しては、その格関係を「復元する」ことが求められる。

まず、日本語記述文法研究会編(2008:56-59)に挙げられている、主名詞が連体節の述語に対してもつ格関係と用法の一覧表を参照しながら、「内の関係」の連体修飾表現のロシア語訳を一つ一つ確認したい。この一覧表は、日本語の9つの格助詞「ガ」「ヲ」「ニ」「ヘ」「ト」「デ」「カラ」「ヨリ」「マデ」のほか、ゼロ格<sup>10</sup>を取り上げ、それぞれの格のもつさまざまな用法別に連体修飾表現を成しやすいかどうかの判断を加えながら、例を挙げてあるものである。また一覧表の中には含まれていないが、同書においては主名詞(X)が連体節中の主語(Y)に対して「XのY」という関係にある場合として、助詞「ノ」<sup>11</sup>も取り上げられている。本稿ではその「ノ」格も含めた形で一覧表を利用し、その日本語例文を露訳したものを以下に掲げる。なお露訳例以外は前掲書の一覧表全体をほぼそのまま踏襲しているが、日本語例文の語句を若干変えたり、言葉を補った部分があるほか、出典の文献において日本語として「不自然」との判断が下されている表現は省略している。なお、ロシア語の連体修飾表現の「内の関係」は基本的に関係代名詞

<sup>9</sup> 下でも触れるが、格関係を表す手段として格助詞以外の要素を検討する必要があることは、たとえば加藤(2002:215)などでもすでに指摘されている。

<sup>10</sup> 例えば「昨日(φ)地震があった」の「昨日」のように格助詞を伴わずに副詞的に「時」を表す場合を、「ゼロ格」としている。

<sup>11</sup> 上でも触れたように、格助詞の中に「ノ」を含めない立場もあり得るが、本稿では「ノ」も格助詞と考える。

CULTURE AND LANGUAGE, No. 71

によって表現されるものとする。場合によっては、関係代名詞を用いない表現の方が自然なこともあるが、ここでは論理的、文法的に可能なかぎり、関係代名詞を用いた翻訳を考えることとする。

格	用法	日本語例	露訳例
ガ格	動きの主体	走っている犬	собака, <b>которая</b> бегает
		揺れているカーテン	занавеска, <b>которая</b> колышется
		日々変化している町	город, <b>который</b> меняется с каждым днем
	状態の主体	机の上にある本	книга, <b>которая</b> лежит на столе
		とても美しい空	небо, <b>которое</b> очень красивое
	対象	父が好きな酒	вино, <b>которое</b> нравится отцу
		遠くに見える山	гора, <b>которая</b> виднеется вдали
		私が弾ける楽器	инструмент, <b>на котором</b> я умею играть (инструмент, <b>который</b> мне доступен)
	ヲ格	対象	父が読んでいる新聞
私が愛している人			человек, <b>которого</b> я люблю
起点		船が出た港	порт, <b>из которого</b> отправилось судно
経過域		私たちが通った道	дорога, <b>по которой</b> мы шли
		彼らが過ごした年月	годы, <b>которые</b> они провели
ニ格	状態の主体	答えがわからない学生	студент, <b>которому</b> не понятен ответ
		妻子がある人	человек, <b>у которого</b> есть жена и дети
	対象	みなが賛成した案	идея, <b>с которой</b> все согласились
		私があこがれている先生	преподаватель, <b>которого</b> я обожаю

和文露訳の問題点(2) (高橋健一郎)

格	用法	日本語例	露訳例	
二格	相手	私が相談した弁護士	адвокат, <b>с которым</b> я посоветовался	
		私が教わった先生	учитель, <b>у которого</b> я учился	
	場所	エアコンがある部屋	комната, <b>в которой</b> есть кондиционер	
		ひびが入った窓ガラス	оконное стекло, <b>на котором</b> образовалась трещина	
	移動の着点	私が昨日行った美術館	музей, <b>в который</b> я вчера ходил	
	時	店が開く 10 時	десять часов, <b>когда</b> открывается магазин <sup>12</sup>	
		葵祭が行われる 5 月 15 日	15 мая, <b>когда</b> проводится праздник «Аой»	
へ格	移動の着点	船が向かった港	порт, <b>в который</b> отправилось судно	
ト格	必須の相手	兄が結婚した人	женщина, <b>на которой</b> брат женился	
	任意の相手	鈴木さんが食事をした人	человек, <b>с которым</b> Судзуки обедал	
	比べる相手	趣味が違う人	человек, <b>с которым</b> я расхожусь во вкусах	
デ格	場所	子どもたちが遊んでいる公園	парк, <b>в котором</b> дети играют	
	手段	道具	チーズを切るナイフ	нож, <b>которым</b> режут сыр
		方法	議長を選ぶ投票	голосование, <b>которым</b> избирают председателя
		材料	鶴を折る紙	бумажка, <b>из которой</b> складывают фигурку журавля
		構成要素	委員会を構成する 5 人のメンバー	пять членов, <b>из которых</b> состоит комиссия

<sup>12</sup> このように具体的な時間が主名詞（先行詞）の場合には、関係代名詞 **который** は使いにくい場合が多く、ここでは関係副詞 **когда** を使っている。次の例文やヨリ格の例文、φ格の2つの例文も同様。

格	用法	日本語例	露訳例
デ格	起因・根拠	変化の原因	看板が倒れた原因 причина, <b>по которой</b> упала вывеска
		感情・感覚の起因	悩んでいる原因 причина, <b>по которой</b> я страдаю
		行動の理由	試験を欠席した理由 причина, <b>по которой</b> я не сдавал экзамен
		判断の根拠	母が隣室にいると思った根拠 основание, <b>на котором</b> я подумал, что мама находилась в соседней комнате
	限界	応募を締め切る人数 количество людей, <b>по достижении которого</b> прекращается приём заявлений <sup>13</sup>	
	目的	歯を抜いた目的 цель, <b>для (с) которой</b> удалили зуб	
カラ格	動きの主体	連絡しておく担当者 <sup>14</sup> занимающийся этим делом сотрудник, <b>которым</b> будет сообщено	
	起点	移動の起点	子供たちが出てきた部屋 комната, <b>из которой</b> вышли дети
		手紙をもらった相手 человек, <b>от которого</b> я получил письмо	
	方向の起点	富士山がよく見える部屋 комната, <b>из которой</b> хорошо видна гора Фудзи	
		隣家まで50メートルある家 комната, <b>от которой</b> до соседнего дома 50 метров	
範囲の起点	店が開く時間 время, <b>с которого</b> работает магазин		

<sup>13</sup> 日本語の「デ」格はさまざまな用法をもち、ロシア語の対応を考えにくい場合があるが、この場合も「そこに到達したのちに」のように言葉を補わなければ露訳しにくいようである。

<sup>14</sup> 出典である日本語記述文法研究会編（2008：57）にもあるように、ふつうは「担当者に連絡しておく」や「担当者が連絡しておく」との解釈が優先され、前者の場合は **которому** я сообщу、後者は **который** сообщит などと訳されよう。

和文露訳の問題点(2) (高橋健一郎)

格	用法	日本語例	露訳例
カラ格	経過域	虫が出て行った窓	окно, <b>из которого</b> вылезло насекомое
	起因・根拠	火事が起きた原因	причина, <b>по которой</b> произошёл пожар
ヨリ格	起点	店が開く 10 時	10 часов, <b>когда</b> открывается магазин
マデ格	着点	佐藤さんが出かけた名古屋	Нагоя, <b>до которого</b> доехал Сато
ノ格	所有者	髪が長い人	человек, <b>у которого</b> длинные волосы
	部分に対する全体	屋根が台風で吹き飛んだ家	дом, крышу <b>которого</b> унесло тайфуном
	所属先	代表が休んでいる組	группа, представитель <b>которой</b> отсутствует
	動きの主体	帰宅が遅れている父	отец, <b>чьё</b> возвращение домой задерживается
	動きの対象	栽培が難しい野菜	овощи, выращивание <b>которых</b> трудно
φ	時	合格発表がある明日	завтрашний день, <b>когда</b> будут объявлены результаты экзаменов
		雨が降っていた午前中	первая половина дня, <b>когда</b> шёл дождь

これらの翻訳例を見てわかるとおり、露訳の際には、日本語の連体修飾節で表に出ない格関係を「復元」ないし「想定」することが必要であり<sup>15</sup>、それさえ理解できれば、あとは通常の和文露訳の問題に他ならない。しかしながら、すでに触れたとおり、日本語の「内の関係」で想定される格関係はこれだけではない。この分類ははらんでいる問題点を明らかにしながら、次節でさらに考察を進めよう。

<sup>15</sup> 「復元」という言葉を使ったが、日本語の連体修飾表現は、もともと存在した格関係が何らかの変形操作によって消えたと考えることが妥当であるとは限らない。しかし本文でも触れたとおり、ロシア語に訳す場合にはいづれにしても少なくとも格関係を「想定」しなければならない。

#### 4. さらに「内の関係」について：格関係再考

前節では多くの先行研究にしたがって、日本語の10の格助詞をとりあげ、それらが表す格関係によって成り立つとみなせる連体修飾表現の例文の露訳を考えた。しかし日本語の格関係は本当にこれらの「格助詞」によってしか表わされないのだろうか。例えば、次のような例を見てみよう。

(19) 毎日が祭りである学生

(20) 昨日彼があなたに話していた学生

これらは上で挙げた「格助詞」によって文を開くことは不可能であろう。しかし、「外の関係」に分類することもできない、れっきとした「内の関係」の例文である。(19)(20)をそれぞれ叙述文に展開すると、次のようになるのがふつうである。

(21) 学生にとって毎日が祭りである。

(22) 昨日彼があなたに学生について話していた。

つまり、この場合上記の「格助詞」ではなく、「にとって」や「について」などのいわゆる「複合助詞」によってしか格関係を表せず、これだけからでもすでに前節の日本語の「内の関係」の分類が不完全であることがわかる。

このように、これまでの多くの日本語の連体修飾表現の「内の関係」に関する議論の大きな欠点の一つは、格関係を考える際に格助詞のみを要素とし、格助詞によって叙述文に展開できるかどうかのみを決定要素としている点である。ここで、格関係という概念を捉えなおす必要があるだろう。

「格」の議論においては、「深層格」や「意味格」などと呼ばれる意味論的なレベルのものと、形式格である「表層格」とを区別することがある。深層格とは

語と語の間の抽象的な意味関係であり<sup>16</sup>、表層格とは言語的に実現される形態上の格のことである。深層格は未だ決定的なものは提示されていないものの、個別言語に依存しない普遍的なもの想定され、表層格は形式格である以上、当然個別言語によって異なるものである。

連体修飾表現に関する従来の多くの研究では日本語の「表層格」のみが念頭に置かれ、10個前後の格助詞によって叙述文に開けるかどうかだけが「内の関係」の分類基準とされ、格助詞で開けないものの「内の関係」でありそうなものについては「短絡的表現」のように分類困難なものとして扱われてきた。しかし、そもそも日本語における「格助詞」の数すら研究者によって一定していないことを考えると<sup>17</sup>、それでは分類として不完全であることは言うまでもないし、上の例文のように「内の関係」の文であっても、叙述文に展開することすらできない例も出てきてしまう。

近年の語用論的な方向性をもつ連体修飾表現研究においては、これを根拠に「内の関係」の格関係の議論を回避する傾向があるのだが、しかしはじめに触れたように、格関係を統語論的に明示しなければならないロシア語への翻訳という問題設定の中では、格関係を回避するわけにはいかない。では、どのように修正を加えるべきだろうか。

連体修飾表現の「格関係」を考える場合には、どの格助詞によって叙述文に展開できるかということが重要なのではなく、そこにある「深層格」を想定すべきである。それは形式的には日本語では「格助詞」によって捉えられる場合が多いだろうが、場合によっては上で見た例文(19)や(20)のように複合助詞によって捉えられることもあれば、さらに別の言語表現が可能な場合もあるかもしれない。

このように連体修飾の格関係を捉えなおした場合、次にどのように「深層格」

---

<sup>16</sup> より正確に定義付けすれば、「深層格とは、述語と共起する名詞句の述語に対する意味的關係、または、述語の意味する現実の一断面、あるいは動作・状態・関係・シチュエーション・こと・事柄・出来事においてその必須または随意的参加者の担う意味的役割」(国立国語研究所 1997: 8)である。

<sup>17</sup> 例えば小泉(2007: 20)には「格助詞をめぐる諸説」という一覧表が掲載されているが、そこでは日本語の格助詞の分類に関する10の異なる立場が挙げられており、格助詞の数で言うと、7つから11までさまざまである。

を設定すべきかという問題が当然生じるが、日本語とロシア語の格体系の全体的な対照という問題は本稿の域を超え出る非常に大きな問題であるために、一覧表のようなものを提示することは本稿ではできないが、従来の連体修飾表現研究で抜け落ちてきたものを中心に、考察の方向性を次節において示そう。

## 5. 日露対照研究の枠組みにおける新たな「内の関係」を目指して

言語理論において「深層格」を確定しようという試みは、フィルモアの格文法（フィルモア 1975）をはじめとしてさまざまあるが、諸言語に普遍的な深層格の目録を作りだすことに成功はしていないようである。これまで、例えば国立国語研究所（1997）、村木（2000）などが日本語における深層格を規定しようとした試みとして存在するが、そもそも深層格をいくつ規定できるかは、抽象度のレベルによって任意に設定できるものであり（村木 2000 : 82）、目的によってさまざまになり得る性質のものだろう。であるから、和文露訳つまり日露対照研究という問題設定においては、その目的にふさわしい記述の精度と抽象度の度合いをもって新たに「深層格」を設定するのが望ましい。

深層格のリストを提示することは今後の課題とするが、基本的な格関係はだいたいのものについては本稿第 3 節で示された格助詞の分類によってカバーされているはずであり、ここではそこから漏れている問題をいくつか例として挙げてみたい。

まずは上であげた例(19)と(20)である。(19)に見られる格関係は暫定的に「判断の当てはめ先」、(20)のほうは「対象（テーマ）」としておこう<sup>18</sup>。

<sup>18</sup> これらの深層格（格役割）については、東京外国語大学留学生日本語教育センターグループ KANAME 編（2007）を参照した。



和文露訳の問題点(2) (高橋健一郎)

深層格	表層格	日本語例	露訳例
判断の当てはめ先	ニ、ニトツテ など	毎日が祭りである学生	студент, <b>для которого</b> каждый день – праздник
対象 (テーマ)	ヲ、デ、ニツイ テ、ニカンシテ など	昨日彼があなたに話していた学生	студент, <b>о котором он</b> вчера вам говорил

前置詞の数が明確であり、文法格もはっきりしているロシア語の場合、「格関係」は日本語に比べてはるかに明確である。「内の関係」の根底にある「格関係」を深層格のレベルで考察する場合には、日本語よりもロシア語の考察から出発するほうが有益である場合もあるだろう。例えば、благодаря (～のおかげで)、из-за (～のせいで) という前置詞を考え、それと関係代名詞の組み合わせによる連体修飾表現を考えてみよう。

(23) книга, **благодаря которой** станешь умнее

(24) книга, **из-за которой** не спишь ночами

それぞれ日本語の連体修飾表現として訳すと次のようになる：

(25) 頭の良くなる本

(26) 寝不足になる本

これらは実は、従来の多くの連体修飾研究において「短絡」と呼ばれてきた有名な例である。短絡とは、「主名詞と特定の格関係を結ぶはずの連体節の述語が欠落する現象のことである」(益岡 2002: 96)。つまり、本来格関係を結ぶはずの連体節の述語がないために、あるはずの「格関係」が想定できず、意味的に近い述語を補って考えなければならないとされ、例えば

- (27) (この) 本を**読めば**頭がよくなる  
 (28) (この) 小説を**読めば**寝不足になる

のように言葉が補われて分析されてきた<sup>19</sup>。

しかしすでに述べたように、本稿ではどの言語形式によって叙述文に開けるかが問題なのではなく、「内の関係」に内在する格関係はまずは深層格によって規定されるべきであり、それは言語形式的には格助詞によってのみ支えられているものではなく、場合によっては複合助詞あるいは動詞やその他の表現ですらよいとみなす。そう考えれば、(25)であれば、場合によっては格助詞「で」のほか、複合助詞の「のおかげで」や「によって」によって、次のような叙述文に開いてもいいだろう<sup>20</sup>：

- (29) (この) 本**で**頭がよくなる  
 (30) (この) 本**のおかげで**頭がよくなる  
 (31) (この) 本**によって**頭がよくなる

これらは前節の一覧表のなかの「デ格」の用法のうちの「起因・根拠」と同じものと考えられるが、日本語とロシア語の対照研究においては、ロシア語に *благодаря* (～のおかげで) という特に「肯定的な」起因・根拠を表す前置詞が存在し、日本語にもほぼ同等の複合助詞があることを考え、「起因・根拠」を細分化して、「起因・根拠(肯定的)」を深層格として規定してもよいだろう。

同様に(26)に関しても、次のように文を開くことが可能である：

- (32) (この) 本**で**寝不足になる

<sup>19</sup> 例えば、寺村(1977a: 75-76)、日本語記述文法研究会編(2008: 59-60)などを参照。

<sup>20</sup> 加藤は(29)(30)(31)のような文を「やや不自然」で、動詞を補う方が「自然」としているが、本稿ではどのような深層格が想定されるのかが問題であり、このように表層格を用いて展開された個々の叙述文がどれだけ日本語として自然か否かを論じることには意味がないと考える。

和文露訳の問題点(2) (高橋健一郎)

- (33) (この) 本の**せい**で寝不足になる  
 (34) (この) 本の**ため**に寝不足になる  
 (35) (この) 本に**よ**って寝不足になる

などさまざまな例が考えられるが、この場合も格関係は日本語の「…のせいで」とロシア語の *из-за* が意味的にほぼ対応することから、例えば「起因・根拠(否定的)」を規定することができる。

深層格	表層格	日本語例	露訳例
起因・根拠(肯定的)	ノオカゲデ など	頭が良くなる本	книга, <b>благодаря</b> <b>которой</b> станешь умнее
起因・根拠(否定的)	ノセイデ など	寝不足になる本	книга, <b>из-за которой</b> не спишь ночами

さらに、次のような例も取り上げよう。

- (36) 太郎がホームランを打ったユニフォーム

これは通常

- (37) 太郎がホームランを打った**ときに着ていた**ユニフォーム

というように、「ときに着ていた」が省略された「短絡的表現」とされる<sup>21</sup>。し

<sup>21</sup> 益岡(2002: 97)を参照。なお、もともとこの例文は松本(1993: 108)で出されたものである。「語用論的」研究を目指す松本は、主名詞に備わった意味や語用論の見地からして主名詞の役割の解釈が自然に定まり、しかもそれが連体節内の述語によって想起されるシーンに矛盾しないものであれば、その役割が格役割でないとしても、この意味

かしロシア語では「着用」を表す前置詞「**в**（+前置格）」を用いれば、次のように「前置詞+関係代名詞」というごく普通の「内の関係」の表現として表現可能である。

(38) **униформа, в которой** Таро сделал хоум-ран

日本語でも「太郎が（その）ユニフォーム**で**ホームランを打った」のように格助詞「**で**」で格関係を示すことも可能であろう。一般的には格助詞「**で**」が「着用」（より広くは「様態」）を表すのもけっして珍しいことではなく、(39)や(40)のような例はごく普通である：

(39) スーツ**で**会場に来た

(40) 浴衣**で**パーティーに現れた

もちろん、(36)を叙述文に開く際には、格助詞にこだわらずに「～を着て」と動詞を補ってもここでは構わない。そして、本稿ではこれは「短絡」という例外的な文ではなく、「内の関係」と考えたい。ではその際の「深層格」はどのように規定したらよいだろうか。ロシア語の **в**（+前置格）がおそらく〈場所格〉（位置格）から派生して「着用」という意味を持つようになったと考えられるのに対し、日本語ではこの「**で**」はそこまでの明確な用法をなしていないように思われる。しかし、これは例えば次の例文のように比較的広範囲に日本語とロシア語で並行的に対応関係が見られるものである。

(41) **очки, в которых** он выглядит более взрослым

---

論的語用論的に導かれた解釈の方が格役割の一つを当てはめようとしたものより優先的に採られるのである、と説明し（松本 1993 : 109）、ここに格関係を見て取ること自体をそもそも否定しているが、しかしそれに対して本稿の立場はなんらかの格関係を「想定」しようとするものである。

- (42) 彼がもっと大人に見えるメガネ
- (43) 彼がメガネで／をかけるともっと大人に見える<sup>22</sup> (叙述文)
- (44) костюм, **в котором** он был на выпускном вечере
- (45) 彼が卒業パーティーに出たスーツ
- (46) 彼が卒業パーティーにスーツで／を着て出た (叙述文)

このような深層格は、日本語とロシア語の対照分析という分野においては、「場所格」では抽象度が高すぎ、「様態」<sup>23</sup>あるいはさらに限定して「着用」とすべきだろう。

深層格	表層格	日本語例	露訳例
着用	デ、ヲ着テ、ヲ身ニツケルトなど	太郎がホームランを打ったユニフォーム	униформа, <b>в которой</b> Таро сделал хоум-ран
		彼がもっと大人に見えるメガネ	очки, <b>в которых</b> он выглядит более взрослым
		彼が卒業パーティーに出たスーツ	костюм, <b>в котором</b> он был на выпускном вечере

もう一つ例を挙げよう。

- (47) 普通ガスが使われる燃料

<sup>22</sup> 「彼がもっと大人に見えるメガネ」は「彼がメガネのおかげでもっと大人に見える」のように「起因・根拠（肯定的）」という格関係を想定することもできる。

<sup>23</sup> 日本語記述文法研究会編（2002：57）では「デ格」の「様態」という用法は連体節を作らないとされているが、これはその反証となる。

この連体節表現を叙述文に展開すれば、「ニ」や「トシテ」を用いて

(48) 燃料として普通ガスが使われる

(49) 燃料に普通ガスが使われる

などとなる。前節の格助詞に基づく一覧表では「ニ」格に「資格」という用法が挙げられていないが、この例以外にも例えば「議長に選ぶ」などのように「ニ」格は「資格」という意味役割をもつ場合もあり、それが連体修飾表現の格関係を構成する場合もある。

深層格	表層格	日本語例	露訳例
資格	ニ、トシテ など	普通ガスが使われる燃料	топливо, в качестве которого используется преимущественно газ

ここではこれ以上考察を進めないが、このように深層格のレベルで「格関係」を規定し、言語的な実現のレベルでは格助詞以外のものも含めて考えるべきであるし、形式格である表層格に関わらずそういう意味関係が成り立つものを「内の関係」と定義することが、特に日露対照分析の分野においては有効である。

### 小結

これまでの議論を簡単にまとめておこう。日本語の連体修飾表現は、連体節と主名詞との間のさまざまな関係が明示されないという特徴をもち、その間に「格関係」があるかどうかによって「内の関係」と「外の関係」に分けられてきた。この場合の格関係は従来の多くの研究では、「格助詞」によって支えられるものであるとされてきた。本稿ではまずそれに従いながら、10個の日本語の格助詞

の関係をさらに用法別に分類し、それによって表わされる格関係にもとづく「内の関係」の連体修飾表現の例文のロシア語訳を試みた。しかしながら、その基準となる「格関係」に関しては、多くの先行研究で考えられてきたように「格助詞」のみを基準とするのではなく、「深層格」のレベルで設定しなければそこから漏れてしまう例が多数あることも示した<sup>24</sup>。今後の課題としては、日本語とロシア語の格関係の対応を総合的に考察することが必要であり、またどういった格関係が日本語とロシア語で連体修飾表現になりやすいか、その程度を調べることも必要だろう。

次稿では「外の関係」の連体修飾表現について考えることにするが、議論を先取りすれば、主名詞の種類によっては、日本語では「外の関係」と考えられるものが、ロシア語では「内の関係」でしか表現できない場合もあるなど、「内の関係」、「外の関係」の両者の間の関係は実は日露両言語間で一筋縄ではいかない。「内の関係」の議論に関しては、次稿でも適宜触れることとする。

## 参照文献

- 石綿敏雄 (1990) 『現代言語理論と格』 ひつじ書房  
井上和子 (1976) 『変形文法と日本語・上』 大修館書店  
奥津敬一郎 (1974) 『生成日本文法論』 大修館書店  
加藤重広 (2003) 『日本語修飾構造の語用論的研究』 ひつじ書房  
金谷武洋 (2002) 『日本語に主語はいらない：百年の誤謬を正す』 講談社  
小泉保 (2007) 『日本語の格と文型：結合価理論にもとづく新提案』 大修館書店

<sup>24</sup> なお、高橋 (2009) で「主題」を表す助詞「は」を伴う構文を取り上げたなかで、日本語学における先行研究にのっとって、「格成分が主題になっている文」を考察した。ここでは「は」が「が」「を」「に」「で」「へ」という格助詞の代替をするという前提のもとに論をすすめたが、しかし格関係が格助詞のみに限定されないという問題点は「は」による主題表現にも当てはまる問題であり、助詞「は」は格助詞以外に複合助詞のほか、さまざまな言語形式の代替をするときみなせる場合がある。「格関係」が形態上明示されないという点では、連体修飾も「は」を伴う主題表現もほぼ同様であり、今後これらを含めて日本語とロシア語の格関係の体系を考察していきたい。

- 国立国語研究所 (1997) 『日本語における表層格と深層格の対応関係』三省堂
- 佐伯哲夫 (1966) 「複合格助詞について」／『言語生活』178号、80-87頁
- 白川博之 (1986) 「連体修飾節の状況提示機能」／『言語学論叢』5、筑波大学文学言語研究科、1-16頁
- 城田俊 (1981) 「格助詞の意味」／『国語国文』50巻4号
- 高橋健一郎 (2009) 「和文露訳の問題点(1)——主題を表す「は」を伴う構文の翻訳法についての試論——」／札幌大学外国語学部紀要『文化と言語』第70号、157-192頁
- 塚本秀樹 (1991) 「日本語における複合格助詞について」／『日本語学』1991-3 (Vol. 10-3)、78-95頁
- 寺村秀夫 (1975) 「連体修飾のシンタクスと意味—その1—」／大阪外国語大学留学生別科『日本語・日本文化』4号、71-119頁
- 寺村秀夫 (1977a) 「連体修飾のシンタクスと意味—その2—」／大阪外国語大学留学生別科『日本語・日本文化』5号、29-78頁
- 寺村秀夫 (1977b) 「連体修飾のシンタクスと意味—その3—」／大阪外国語大学留学生別科『日本語・日本文化』6号、1-35頁
- 寺村秀夫 (1978) 「連体修飾のシンタクスと意味—その4—」／大阪外国語大学留学生別科『日本語・日本文化』7号、1-24頁
- 東京外国語大学留学生日本語教育センター グループKANAME 編 (2007) 『複合格助詞がこれでわかる』ひつじ書房
- 日本語記述文法研究会編 (2008) 『現代日本語文法6 第11部 複文』くろしお出版
- フィルモア、C. (1975) 『格文法の原理——言語の意味と構造』田中春美・船城道雄訳、三省堂
- 益岡隆史 (1997) 『複文』(新日本語文法選書2) くろしお出版
- 益岡隆史 (2002) 「複文各論」／野田尚史・益岡隆史・佐久間まゆみ・田窪行則『日本語の文法4 複文と談話』岩波書店、63-116頁
- 益岡隆史 (2003) 『三上文法から寺村文法へ——日本語記述文法の世界』くろし



和文露訳の問題点(2) (高橋健一郎)

お出版

- 益岡隆史 (2009) 「連体節表現の構文と意味」 / 『言語』 Vol.38-1, 2009-1、18-25 頁
- 松本善子 (1993) 「日本語名詞句構造の語用論的考察」 / 『日本語学』 12/11、  
101-114 頁
- 松本善子 (1994) 「意味から見た連体修飾のいろいろ」 / 『月刊言語』 23/9、124-127  
頁
- 三井正孝 (1993) 「ニツイテ格の意味」 / 『静岡英和女子学院短期大学紀要』 第  
25号、57-66 頁
- 村木新次郎 (2000) 「格」 / 仁田義雄・村木新次郎・柴谷方良・矢澤真人『日本  
語の文法 1 文の骨格』 岩波書店、47-115 頁
- 森田良行・松木正恵 (1989) 『日本語表現文型：用例中心・複合辞の意味と用法』  
アルク
- 森山新 (2007) 「認知言語学的観点による日本語の連体修飾研究—連体修飾節・  
ノを用いた連体修飾を中心に—」 / 『日本語学報』 72、2007 年、1-18 頁